

子どものコミュニケーションの実態に応じた 教師のかかわり方についての研究

佐賀県立大和養護学校 教諭 岩瀬 真智子

要 旨

子どもが意欲をもってコミュニケーションを行うためには、自分の発信が相手に伝わる経験の積み重ねが大切である。そこで、本研究では子どものコミュニケーションの意欲を引き出す教師のかかわり方を明らかにすることを目的とした。対象児への個別指導をビデオに記録し、詳細に分析することによって、子どもの発信に気付き、伝達意図を理解することができた。また、子どもがとらえやすい応答をすることの重要性に気付き、どのような応答の方法が適切であるか、明らかにすることができた。

<キーワード> コミュニケーション 受信と発信 伝達意図 伝達意欲

1 主題設定の理由

子どもたちが主体的に生活できるように、自分の意思や気持ちを他者に伝える力や自己選択する力を育むためには、コミュニケーションの指導が重要である。コミュニケーションは、伝達行為を行う「発信する側」と、それを受け止め応答する「受信する側」の双方が、相手の伝達行為から伝達意図を理解し応じていくプロセスである。そのことから、教師の資質を高め子どもとの意思疎通を図ることは、子どものコミュニケーションの発達を促すことにつながると考える。教師が子どもの現在のコミュニケーションの実態を理解し、発話や行動に対して適切に応答していくことで、子どもは自分の気持ちを伝えることができたという成就感をもち、他者とのかかわりをもちたいという気持ちが高まるのではないかと。子どもにコミュニケーションの成功経験を積ませるために、教師がどのような視点をもって子どもとのかかわっていかねばならないか明らかにする必要があると考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

子どもの発話や行動の背景を理解し、どのような教師の対応が、子どものコミュニケーション能力を高めるために有効か、明らかにする。

3 研究の仮説

教師が、子どもの現在のコミュニケーション能力を大事にし、ささいなサインを受け止めようとする姿勢で子どもの行動を探っていけば、コミュニケーションの意図を見出して、応じていくことができるだろう。また、子どものサインに対して効果的に対応することで、子どもとのコミュニケーションの状態を改善することができるだろう。

4 研究の内容と方法

- (1) コミュニケーションの発達に関する理論研究を行う。
- (2) 子どもと教師のかかわり方の実態を調査し、検証授業を計画する。
- (3) 検証授業の分析を行う。
- (4) 授業の検証と考察を行う。

5 研究の実際

本研究では、コミュニケーションの構造と要素を図1のようにとらえた。子どもはコミュニケーションを始める主体であると考え、子どもを発信する側、教師を受信する側と位置付けた。それぞれの要素について、子どもの実態を理解し、教師の手立てを考えなければならない。

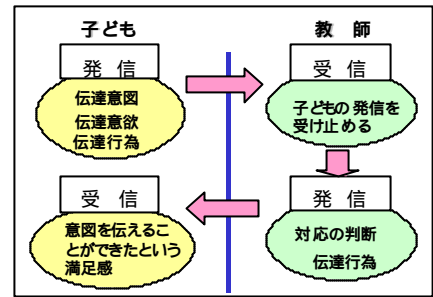


図1 コミュニケーションの構造と要素

(1) 実態調査と検証の計画

ア 児童の実態

本研究ではA養護学校小学部4年生男子のK児（生活年齢：10歳2か月）を対象とした。心理検査の結果を表1に示す。K児は発声や視線を向けることや指さしなどの伝達手段をもち、身近な大人に対する伝達意欲をもっているが、その内容を伝えることはまだ難しい段階である。

表1 心理検査結果

新版S-M社会生活能力検査	乳幼児精神発達診断法
社会生活年齢：3歳6か月	発達年齢：1歳10か月
社会生活指数：33	発達指数：17.7

イ 基本姿勢

これまでの教師のかかわり方を振り返ってみると、「課題に取り組ませることに注意が向き、子どもの発信に気付いていない」「指示や禁止が多く、子どもの気持ちに共感する言葉掛けを行っていない」などの反省点が挙げられる。この反省を基に、教師のかかわり方の基本姿勢を定めた。受信の仕方については「K児の視線、発声、指さしなどささいなサインを見逃さず、必ず反応を返す」、発信の仕方については「K児の要求行動に適切に対応し、意図を理解できない時にも共感する態度で接する」とした。

ウ 検証の視点

仮説を基に、大きく2つの側面について検証の視点を設定した。視点1は「教師は子どものコミュニケーションを支援しているか」（図2参照）である。基本姿勢を守っているかや、具体的に有効な方法を明らかにする。

受信の仕方	発信の仕方
K児の視線、発声、指さしなどささいなサインを見逃さず、必ず反応を返す	K児の要求行動に適切に対応し、意図を理解できない時にも共感する態度で接する
基本姿勢が守られているか検証し、具体的に有効な方法を明らかにする。	

図2 視点1について

視点2は「子どもとのコミュニケーションの状態が改善されたか」（図3参照）である。子どもがもっているコミュニケーション能力を十分発揮することができているかや、やりとりが成立しているかについて、マイクロ分析表から子どもの発信やターンテキング数の変容などを調査し、それを基に検証を行う。

子どもの発信の様子を観察し、子どもがもっているコミュニケーション能力を十分発揮できているか	ターンテキング数を調べる。発信と受信を交互に行い、意図の相互理解ができているか（やりとりが成立しているか）
---	---

図3 視点2について

エ 検証授業の進め方

本研究では、K児に対する個別指導の分析を通して、仮説の検証を行う（図4参照）。分析方法はインリアル・アプローチを参考に、マイクロ分析とマクロ分析の2種類を用いることにした。マクロ分析では、授業全体の様子から教師のかかわり方を中心にコミュニケーションの状況を評価し、次の授業のかかわり方の目標や具体的方法を設定する（表2参照）。マイクロ分析では、時間軸に沿って子どもと教師の発言や行動（トランスクリプト）を書き出し、更に伝達意図や適切なかかわり方を記入する。マイクロ分析表を用いて、ターンテキング（やりとり）が成立しているかや、子どもの伝達の様子や意図などを調べる（表3参照）。

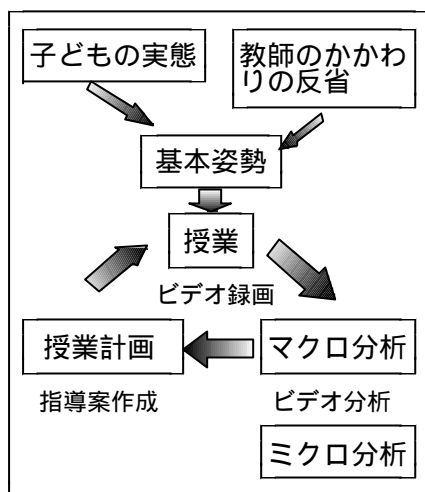


図4 検証の進め方

表2 マクロ分析表

	子ども (K児)	教師 (かかわり手)
評価	<ul style="list-style-type: none"> 自分の行動を少し止めるという方法で、教師の応答を待っている。 自分の意図する反応と違った場合、2, 3回発信を繰り返している。 教師の慌てる振り、痛がる振りを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> K児が混乱しないように、場を整理しなくてはならなかった。 K児の興味や活動の流れが分かり、そこからK児の伝えようとしていることをとらえている。
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> 教師の反応を期待して待ち、更に発信をする 相手に意図が伝わらない場合も諦めず何回か繰り返したり、指さしやジェスチャーなどいくつかの手段を組み合わせ伝えて伝えようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> K児に伝わりやすく、K児の発信にも利用できるように、簡単な言葉にジェスチャーを添える。 ラジカセだけではなく、教師に興味・関心ももてるような遊びの提示をする。
場面設定	<ul style="list-style-type: none"> 風船遊びや散歩の活動に取り組む。 好きなテープ、ラジカセデッキ、C D等が選べるよう活動の場を構造化する。 	<p style="text-align: center;">具体的方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ラジカセごとに机を用意する。 K児がいろいろ物を出してきても、その都度、場の構造化を行う。

表3 ミクロ分析表

活動内容	伝達意図	K児 (トランスクリプト) 教師 T	伝達意図	適切な反応の例
テープを箱から取り出してから	Tの驚く様子が面白い	<ul style="list-style-type: none"> Tを見ながらテープを振り、上叩き振りをする 笑いながらテープで叩き振りをする 	<ul style="list-style-type: none"> 「あー」と大きな声を出し、避ける 「あー」と言い、避ける 	Kの遊びに応じている

(2) 検証授業の分析

検証授業はA養護学校小学部の「分かれて勉強」の時間に行う。この時間は1対1や少人数での指導形態で行い、「国語算数」の教科や自立活動の内容を扱っている。

日時：平成13年11月8日(木)～平成14年1月10日(木)計5回 9:45～10:15

場所：A養護学校 小学部4年B組教室

目標：ラジカセで教師と一緒に遊ぶ。

展開：1回目は複数の認知課題と風船遊び、ラジカセ遊びに取り組んだ。その中でK児の発信が一番よく見られたラジカセ遊びを、2回目以降の学習活動の中心とした。指導案は前時のマクロ分析表を基に、教師の支援について毎時変更した。表4は2回目の検証授業の展開である。

表4 指導案展開 (第2回授業)

学習活動	教師の支援	備考
ラジカセ遊び	<ul style="list-style-type: none"> K児が持ってきたら、ラジカセ遊びを始める。 K児の好きなカセットテープを3～4種類準備する。 K児のする遊びを見守る。 K児からの要求を言語化して返す。 要求する内容がはっきりしない場合は、共感していることを示す働きかけを行う。(ジェスチャーや発声の模倣を行う。) K児の遊びが決まってきたら、別のラジカセを出し、教師が隣で遊ぶ。 次の活動を示す具体的な物(衣装や道具)を提示し、「分かれて勉強」を終え、次の活動に入ることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ラジカセ カセットテープ 上着 (外での活動)

1回目から5回目までの授業の分析で、教師のかかわり方、K児の発信や受信の様子、遊びの様子等に変化が見られた。教師は、1回目の授業では、認知課題に取り組ませることに注意が向き、K児の発信に気付かなかった。2回目は発信に気付いたが、K児の興味・関心の内容が分からず伝達意図を理解することができなかつたり、過剰に手伝おうとして手を払われたりした。3回目からはK児の発信に対して伝達意図を理解できるようになった。しかし、共感できる内容は限られている。教師の発信については、1, 2回目の授業ではK児の伝達意図が分からずあいまいな発信だったり、K児の期待する応答ではないため拒否されたりした。また、教師の言葉掛けのみの発信に、K児は耳を傾けなかった。3回目の授業では、コミュニケーションカードを使用した。K児は目を向けなかった。しかし、テープが

回る様子を指を回すジェスチャーで示したところ，K児が模倣し，やりとりが成立した。

K児は，2回目の授業では発声や視線を教師に向け活発に発信するものの，注意を持続させることが難しいため，教師の応答を待たずにラジカセ操作に移っていた。3回目以降，自分の発信の後に必ず教師の反応があるという見通しをもち，視線を向けて待つようになり，教師の発信に対して応答を返すようになった。また，曲が聞こえることを，指さしや拍手，耳を触るジェスチャーなどの幾つかの手段で発信するようになった。

4回目の授業では，曲に合わせて踊る教師を見ながら，K児がテープを止めたり再生したりして遊ぶ様子が見られた。5回目では，教師の驚く様子を楽しみながら，カセットテープで教師の頭を叩く振りをして遊んだ。ラジカセの一人遊びから共感を経て，教師とのかかわりへと興味が広がってきたと言える。

(3) 授業の検証

2つの視点に沿って検証を行う。まず，視点1の「教師は子どものコミュニケーションを支援しているか」について，受信と発信のそれぞれに基本姿勢が守れなかった原因，注意が必要だったことの2点から，表5，6にまとめ

表5 視点1「受信」についての検証

守れなかった原因	<ul style="list-style-type: none"> ・用意した認知課題に取り組みさせることに教師の注意が向いていた。 ・K児の発信の伝達意図を理解できなかった。 ・ラジカセ遊びの楽しみ方を「曲を聴いて楽しむもの」と限定して考えていたため，K児の興味・関心を理解できなかった。 ・K児が自分でしようとしていた操作に過度の援助をしていた。
注意が必要だったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・K児の発信にすぐ気付くことができるように，K児の表情や動きに注意しておく。 ・K児の視線が何をとらえているか観察しながら，発信を待つこと。（K児の興味をもつ対象がはっきりし，伝達意図も理解できるようになった。） ・K児の困っている心情に共感を示しながら，求められる援助だけ行うこと。

表6 視点1「発信」についての検証

守れなかった原因	<ul style="list-style-type: none"> ・K児が何を要求しているのか受信できなかったために，応じることができなかった。 ・K児がとらえにくい方法で発信していた。（言葉掛けのみや，コミュニケーションカード） ・K児が教師に注目している時間内で，伝達意図の理解とその応答ができなかった。
注意が必要だったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・K児が視線を向ける時，必ず視線が合うようにすること。また，体からK児の方を向き，発信を待っていることを伝えること。 ・聞き慣れている簡単な言葉に指さしやジェスチャーを添えて，発信すること。 ・K児の同じ伝達意図の発信については，同じ応答を行うこと。K児が教師の反応を期待して視線を向けるようになった。 ・K児がクレーン行動で要求を発信できるように手を伸ばして届く範囲にいるようにしたこと。

た。この授業実践の中で，教師はK児の発信に気付き，意図を理解して受信できるようになった。さらに，意図を理解できなかった原因を探ることによって，教師の受信の際に注意することが明らかになった。教師の発信については，子どもの伝達意図を理解しないと適切な教師の発信は難しいことが分かった。しかし，適切な受信を行うことで，子どもに共感し，一緒にラジカセ遊びを楽しむことができるようになった。また，有効な発信の手段についても明らかにすることができた。

視点2の中の「子どもが持っているコミュニケーション能力が十分発揮されているか」については，子どもの発信数，コミュニケーション手段の変容を，マイクロ分析表を基に調査・検証した。

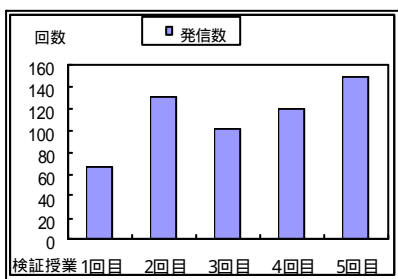


図5 発信数の推移

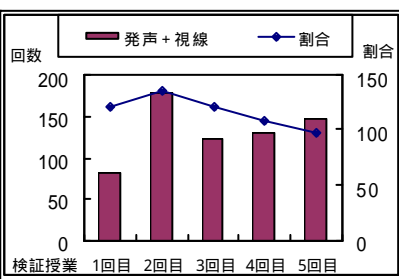


図6 発声と視線の回数と割合

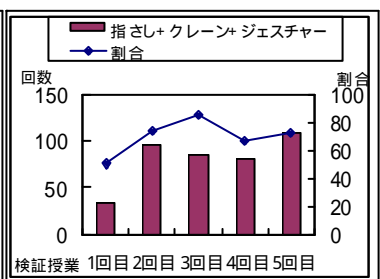


図7 指さし・クレーン行動・ジェスチャーの回数と割合

発信数の推移を図5に示した。グラフから，授業の回数を経るにつれK児の発信が増えていることが

分かる。2回目の授業ではこれまでの認知課題ではなく、好きなラジカセ遊びを行ったことから、K児は興奮して教師に発信したが、教師が意図を理解できなかったため、いらいらした発声をしていた。3回目は、K児はゆっくりラジカセ遊びができることが分かり、遊びに集中できたため、発信数は減少している。しかし、この回でK児の好きな曲を知ることができ、教師がかかわり方の手掛かりを得たという点で、意味のある授業だったと考える。

図6, 7にK児の発信の手段と、全発信に占める割合を示した。発声と視線は、教師に「伝えたいことがある」という伝達意図の有無を示す伝達手段である。まず、発声や視線で注意を引き、指さしやクレーン行動で伝達意図を伝えるというパターンが見られた。回数を経るにつれ発声や視線の割合が減少しているのは、特に注意を引かなくても、教師が応じる態度で待っていることが分かったためだと思われる。それに対して、教師に伝達内容を伝えるための、指さし・クレーン・ジェスチャー等の手段は増加している。そのため、教師はK児の伝達意図を理解し適切な応答ができるようになった。なお、4回目の授業から、テープのケースを開いて見せたりテープを教師の顔の辺りに持ち上げて見せたりするなど、具体物を提示する発信の手段も見られるようになった。

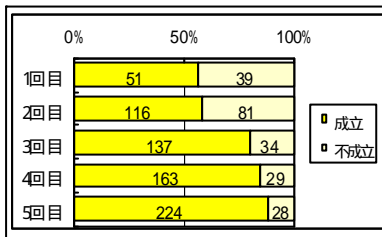


図8 ターンテークの成立と不成立の割合

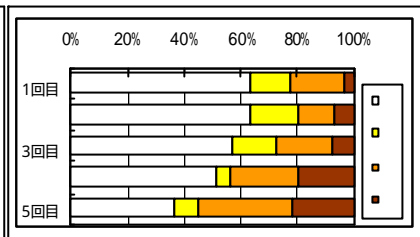


図9 ターンテークの長さ別の割合

表7 ターンテークの長さ

K → T	K → T	K → T	より長いターンテークが続く
or			
K ← T	K ← T	K ← T	

「意図の相互理解ができているか、やりとりが成立しているか」については、まず、1ターンが成立した回数と不成立だった回数と全ターン中の割合を調べた(図8参照)。成立とは、発信が相手に理解され応答が見られることである。不成立とは発信が相手に理解されず無反応だったり、拒否されたりすることである。この図から授業の回を追うごとに、やりとりが成立していることが分かる。このようにコミュニケーションが成立するようになったのは、教師がK児の伝達意図を理解し、意図に応じた反応を返すことができたためであると考えられる。

また、ターンテークの長さについても調査した(図9参照)。図9の ~ はターンテークの長さを表し、それぞれ表7の ~ に対応している。この図から、次第にやりとりが長く続くようになっていくことが分かる。K児が教師の応答を期待して視線を向けて待ち、教師の発信に対して応答したり、同じ伝達意図でも指さしやジェスチャーなどいくつかの手段で確認するように何度も発信したりしたためである。これは、K児が教師とやりとりする楽しさを感じ始めたからだと思われる。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 教師の受信の仕方

教師は、子どもの行動を1つの伝達手段であるととらえ、意図を理解しようとしたため、K児のささいな発信に対して、応答することができるようになった。また、この研究で子どもを理解する視点を明らかにすることができた。1つ目は「子どもが教師に伝達しようという考えをもっているか」という子どもの伝達意図に気付くための視点である。教師は子どもの伝達行動を見逃さず、必ず応答しようという姿勢で子どもに接していかなければならない。2つ目は「子どもの興味・関心の対象は何か」という子どもの伝達の背景を探る視点である。教師の固定観念に子どもの興味を当てはめるのではなく、教師が子どもから新しい楽しみ方を学ぶといった意識をもって、子どもの視線がとらえる対

象に教師も目を向けることが重要である。3つ目は「子どもが伝えようとしている内容は何か」という子どもの伝達意図を理解するための視点である。相手が自分に何を求め発信しているのかを問いつつながら、子どもに注目していかなければならないと考える。

イ 教師の発信の仕方

共感を求められたときに簡単な言葉にジェスチャーを添えて応答するうちに、K児は納得した様子で繰り返し共感を求めてきたり笑顔を見せたりするようになった。このことから、発信の仕方については、音声で注意を引きジェスチャーで内容を伝える方法が適切であることが分かった。子どもが理解しやすい教師の発信の方法は、子どもが自分で発信している方法である。教師の伝達の方法が子どもにとって理解しやすいものであれば、子どもの発信に利用されるという、伝達手段の互換性を示されたと考える。教師は子どもの発信の方法を取り入れながら、命題に合わせて分化させたり、文脈に応じた発信の仕方を工夫したりして、子どもが利用できる伝達手段の提示をすることが重要である。

ウ K児の変容

K児の変容として、教師の反応を期待して視線を向けるようになったこと、反応が返ってくるまで待つようになったことが挙げられる。K児の発信に教師が必ず応答したため、K児が「自分の発信の後に教師の反応がある」という見通しをもち、視線を向けて待つようになった。教師に自分の意図が伝わっていない場合は、何度か発信を繰り返していた。このような発信の仕方の変化は、K児が教師とやりとりすることを積極的に楽しむようになり、教師の反応を期待して引き出そうとしているために起こっていると考えられる。

(2) 今後の課題

ア K児への対応

教師はK児の要求や共感の発信に対し、応答的にかかわることができるようになった。しかし、教師が理解しているK児の伝達の内容は、ラジカセ遊びの場面に限られている。また、同じ指さしでも伝達意図が異なる場合があり、意図の内容を理解できないことがあった。教師がK児の興味・関心をまだ十分とらえていないことも一因として考えられる。今後、K児とのかかわりを深めていく中で、共感できる内容を増やし、K児が理解できる発信を行うことが重要である。

また、今回K児の遊びが、ラジカセ遊びから簡単なルール遊びや「ふり」遊びなど人とのやりとりを楽しむ遊びへと広がってきた。一緒に楽しむ遊びが増えたことは、子どもが教師に伝えたいと思う内容が広がり、発信の仕方にバリエーションが生まれてきたことを示している。そして、人とかかわることが楽しいという子どもの実感が、コミュニケーションの意欲を引き出していくと考える。K児が人とかかわり、遊びの幅を広げていくことも、今後の課題である。

イ 研究の継続

「子どもの現在のコミュニケーション能力を大事にし、ささいなサインを受け止めようとする姿勢で子どもの行動を探っていき、子どものサインに対して効果的に対応すること」について、K児には有効なことが分かったが、発達の遅れが大きい子どもや自閉症児に対しての有効性についても、明らかにする必要がある。また、子ども同士のかかわりの中での教師の役割についても研究を進めていきたい。

《参考文献》

- ・ 竹田 契一・里見 恵子 『子どもとの豊かなコミュニケーションを築くインリアル・アプローチ』 1994年 日本文化科学社
- ・ 笹沼 澄子・大石 敬子 『入門講座 コミュニケーションの障害とその回復 [全2巻] 第1巻 子どものコミュニケーション障害』 1998年 大修館書店